

平成 15 年度

中城湾港泡瀬地区環境保全・創造検討委員会
人工海浜専門部会

現況カルテ・原風景ヒヤリング結果

平成 16 年 2 月 26 日

内閣府沖縄総合事務局開発建設部
沖縄県土木建築部
沖縄市東部海浜開発局
(財)港湾空間高度化環境研究センター

目 次

表 1 . . . ヒアリング結果

図 1 . . . 全体ゾーニング図

図 2 . . . 県総合運動公園前（人工海浜・近自然海岸ゾーン）

図 3 . . . 比屋根湿地前（石積護岸ゾーン）

図 3 - 1 . 比屋根湿地底質・生物変化

図 4 . . . 旧塩田前（消波ブロック護岸ゾーン）

図 5 . . . 泡瀬通信基地前（直立護岸ゾーン）

泡瀬地区原風景ヒアリング調査結果

1. 調査の背景
- 第1回人工海浜専門部会において、泡瀬地区の戦前の植生やオカヤドカリの生息状況などについて、年配の方々から聞き取り調査を行い、地域の原風景を明らかにすることが必要とのご指摘があったことから、以下のとおりヒアリング調査を行った。
2. 調査手法
- 調査は泡瀬地区に戦前から住んでいるの方々に対し、泡瀬地区の現況調査結果（下表参照）を説明した上で、聞き取りを行うという手法をとった。

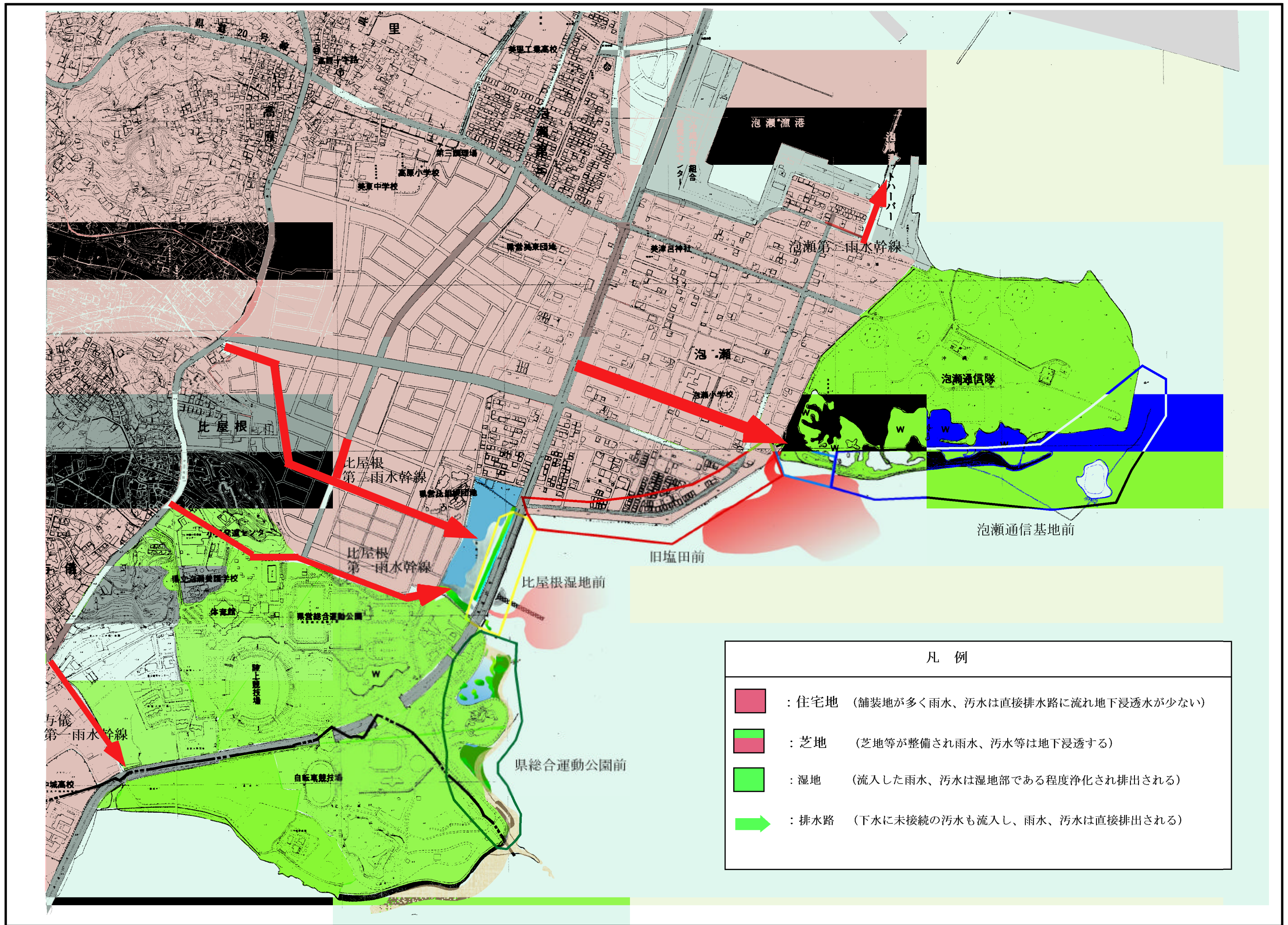
〔現況調査の概要〕

ゾーン	図	ゾーンの特徴
県総合運動公園前 （人工海浜・近自然海岸ゾーン）	図-2	砂が堆積し、自然の植生が豊かである
比屋根湿地前 （石積護岸ゾーン）	図-3,3-1	砂浜が少なく、自然の植生が乏しい
旧塩田前 （消波ブロック護岸ゾーン）	図-4	陸から海浜部にかけて地形に連続性がなく、自然の植生がほとんど見られない
泡瀬通信基地前 （直立護岸ゾーン）	図-5	陸から海浜部にかけて地形に連続性がなく、自然の植生が乏しいが、砂嘴の根元の一部に砂が堆積し、自然の植生が豊かな箇所がある

3. ヒアリング結果
- この結果、原風景は以下の特徴を有していたことが明らかになった。
- 戦前の泡瀬地区には、湿地等が広く分布しており、沿岸域には塩田が広がっていたが、埋立により地形や土地利用が変遷し湿地等が失われた。
- 湿地周辺にはアダン、ハマゴウなど、湿地内にはガマ、イグサ、アシなどが多く生育し、また、ハゼやウナギなどが生息していた。
- 砂州や海浜域には、グンバイヒルガオ、アダン、モクマオなどの植物が多く生育していた。
- 泡瀬半島南側の砂浜に、オカヤドカリ、貝類やカニ類が多く生息していた。
- 昔の泡瀬地区の人口は3千人程度で、汚水・雨水は主に地下浸透していた。
4. 泡瀬の原風景と現況
- ヒアリングの結果、県総合運動公園付近の海浜部が原風景に近似していることが明らかになった。
- 近年は区画整理事業等の面整備が行われたことにより、人口が急激に増加したため、海域への生活雑排水の流入が増え、海域の汚染が進んだ。なお、沖縄市において公共下水道整備事業を平成19年度完成目標に実施している。

項目	ヒアリング結果
後背地	1.人口は、約3000人程度で現在より遙かに少なかった。 2.水質汚濁をもたらす人畜のし尿は、すべて堆肥として畑で利用され海域への汚水の流出は見られなかった。 3.雨水はほとんどが地下浸透していた。 4.生活物資などはすべて再利用され、海域への廃棄物投棄はなかった。
湿地	1.湿地と内海を遮断する道路は石積みで、潮の出入りが常にあり、湿地内は常に新鮮な状態を保っていた。 2.雨水を含む排水は、一旦低地に位置する湿地を通るため、湿地の浄化作用により海域の清澄さが保たれた。
干潟	1.干潟には財産としての塩田があり、立ち入りや汚濁流入の制限を共通認識として持っていたため、海域の清澄さが保たれていた。
植生	1.砂州や海浜域では、グンバイヒルガオ、アダン、モクマオが多く生育していた。 2.湿地の周囲には、アダン、ホーレー(ハマゴウ)、ススキ、湿地の中には、ガマ類(ガマ)、ピーグ(イグサ)、アシなどが多く生えていた。 3.砂山の海岸線沿いにはソギヤ(ニシキギ)が生えていて、水際のすぐ近くでアサも採れた。
動物	1.干潟の砂地には、クバガニ、タチガニがたくさんいた。 2.チバ(積場)やシナ(塩田)前の少し深い所には、ガサミがいてよく採れた。また、シラ(ナコ)やカチヤ(シラゲウ)もたくさんいた。 3.チバや湿地の所には、ユムガニ(ナナアザヤコ)がいて少し穴を掘ると簡単に出てきた。 4.チバ前や珪(砂州)には、石の所にフタガニ(ソデカサバ)がよくいた。 5.半島北側の干潟には、アサリ(アサジクマコイ)、チホーレー、足の長いウ(アダコ)がたくさんいた。 6.南側の砂浜にはヤドカリ(オカヤドカリ)、ハマガニ(アシラガニ)、アマン(カギクガイ)がいて、砂浜の上の護岸の隙間にはコサガニ(イワガニ)がたくさんいた。 7.シナ前の干潟ではキブヤ(リュウキュウホウリ)、アサリ、珪ではウ、アジヤケ(ヒメジャコイ)、エダクがよく採れた。 8.湿地には、トトミ(ハゼ)、サザ(ササ)、カエル、ウギもいた。 9.畑には、ウズラやすずめ、アダンの下には、ママイがたくさんいた。 10.干潮時には、海中道路の橋の下に魚がたくさんみられた。

表1



凡 例	
	: 住宅地 (舗装地が多く雨水、汚水は直接排水路に流れ地下浸透水が少ない)
	: 芝地 (芝地等が整備され雨水、汚水等は地下浸透する)
	: 湿地 (流入した雨水、汚水は湿地部である程度浄化され排出される)
	: 排水路 (下水に未接続の汚水も流入し、雨水、汚水は直接排出される)

図-1 全体ゾーニング図

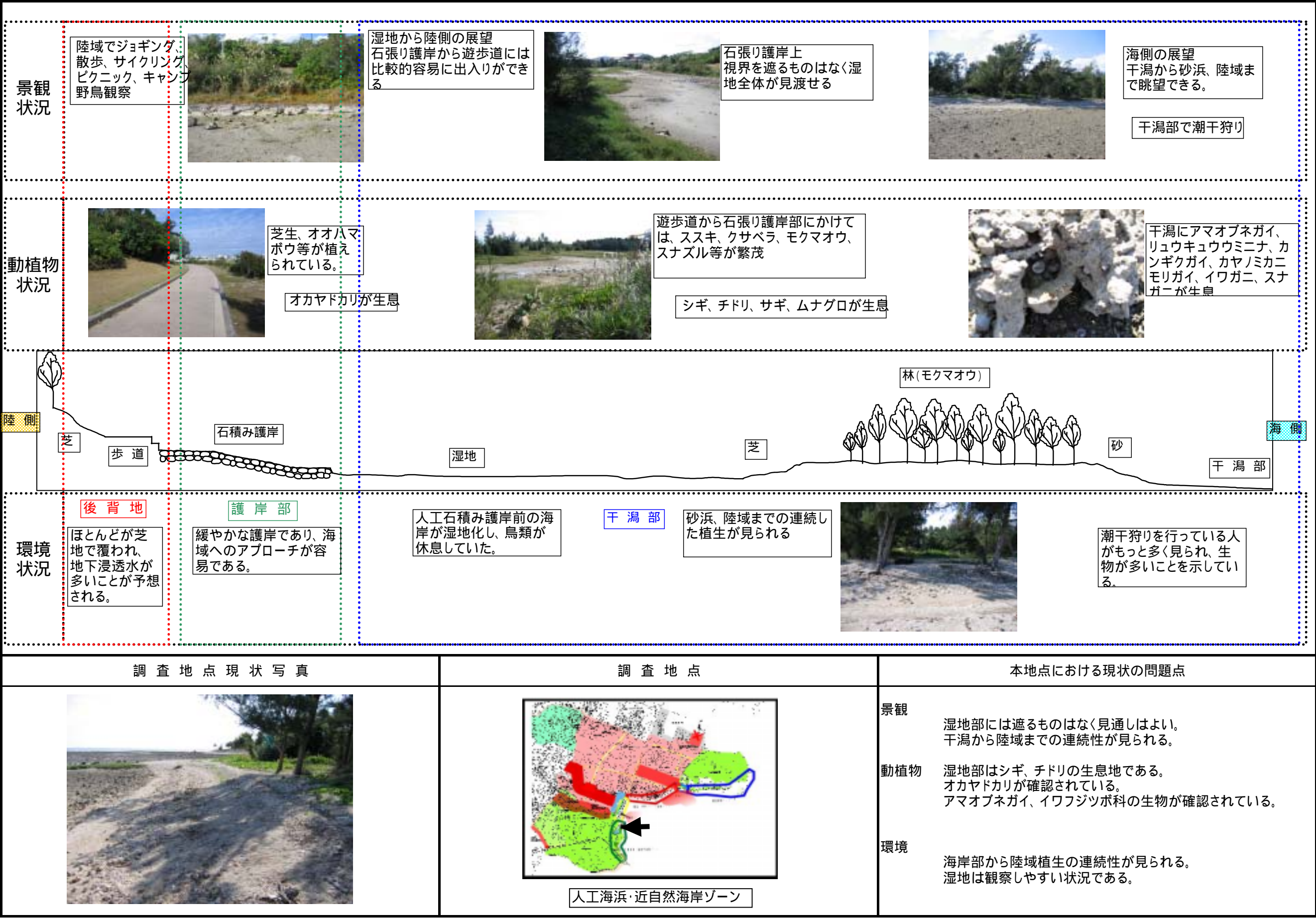


図 - 2 県総合運動公園前(人工海浜・近自然海岸ゾーン)

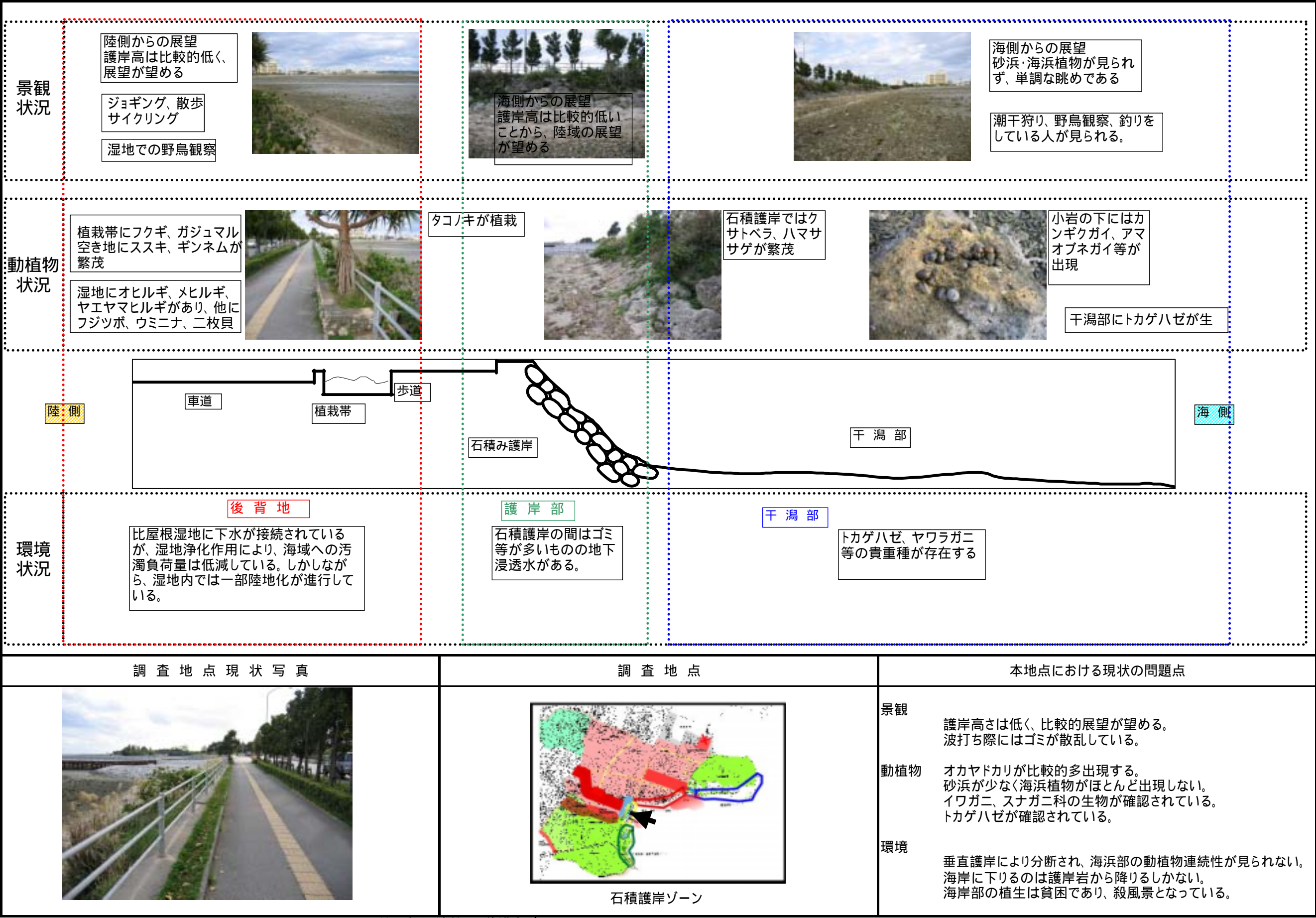
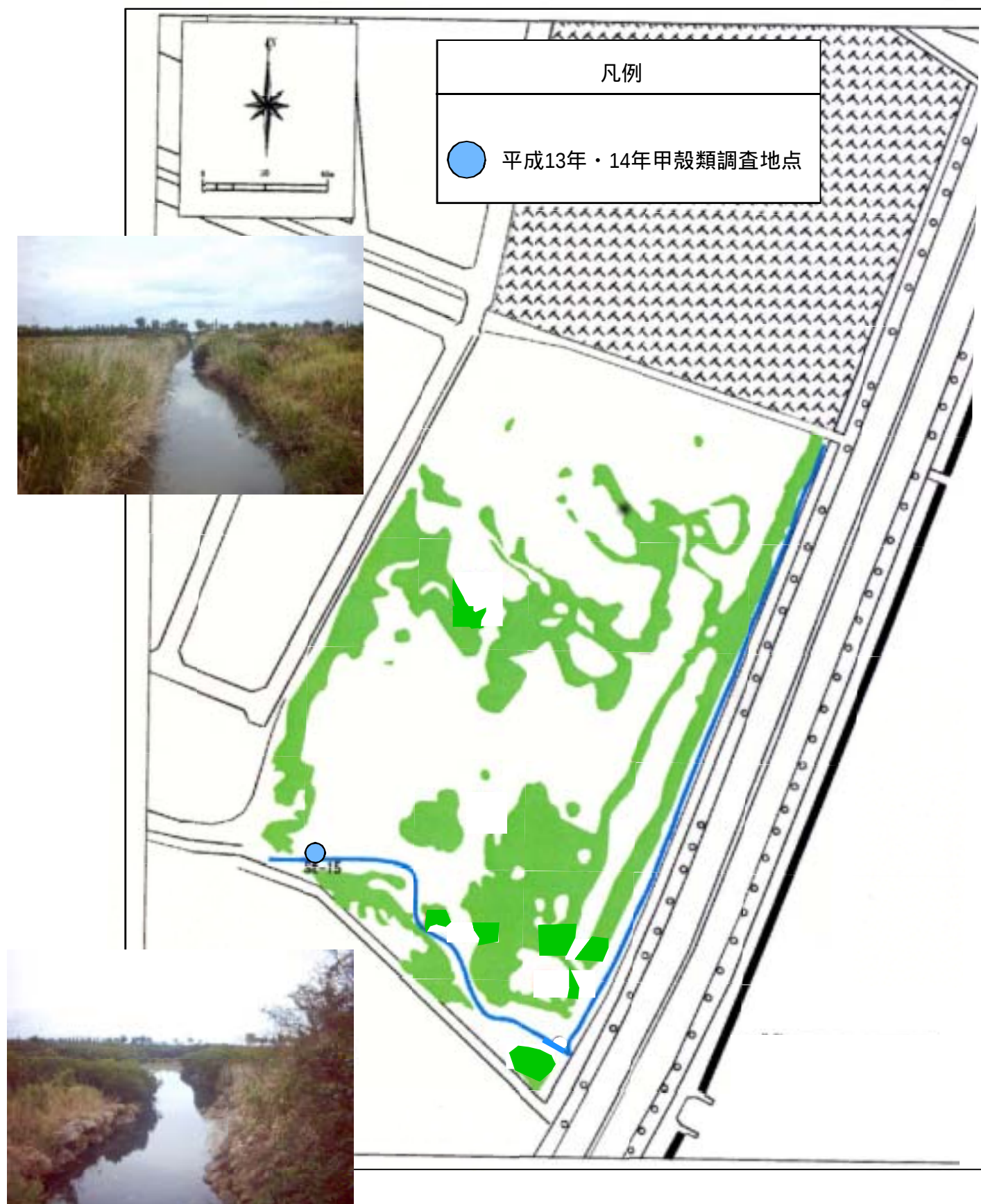


図 - 3 比屋根湿地前(石積護岸ゾーン)



底質・生物の変化

平成14年夏季調査の際に、陸域から直接河川が流れ込むSt.15において、13年度調査時には軟泥地で歩行も困難であった場所が、土砂が流入した事による砂礫分の増加がみられた。

14年冬季調査でもその傾向は変わらず、地盤はそのまま安定している状況であった。
このような底質や地盤高の変化により、そこに生息していた生物相に変化が確認されている。

平成13年優占種



スナガニ科：タイヨウオサガニ

スナガニ科：ヤマトオサガニ

生息場所：比較的地盤の低い軟泥地で多く見られる。

平成14年優占種



イワガニ科：フタバカクガニ

イワガニ科：台湾アシハラガニ

生息場所：地盤の高い砂分の多い底質でも多く見られる。

図3-1 比屋根湿地底質・生物変化

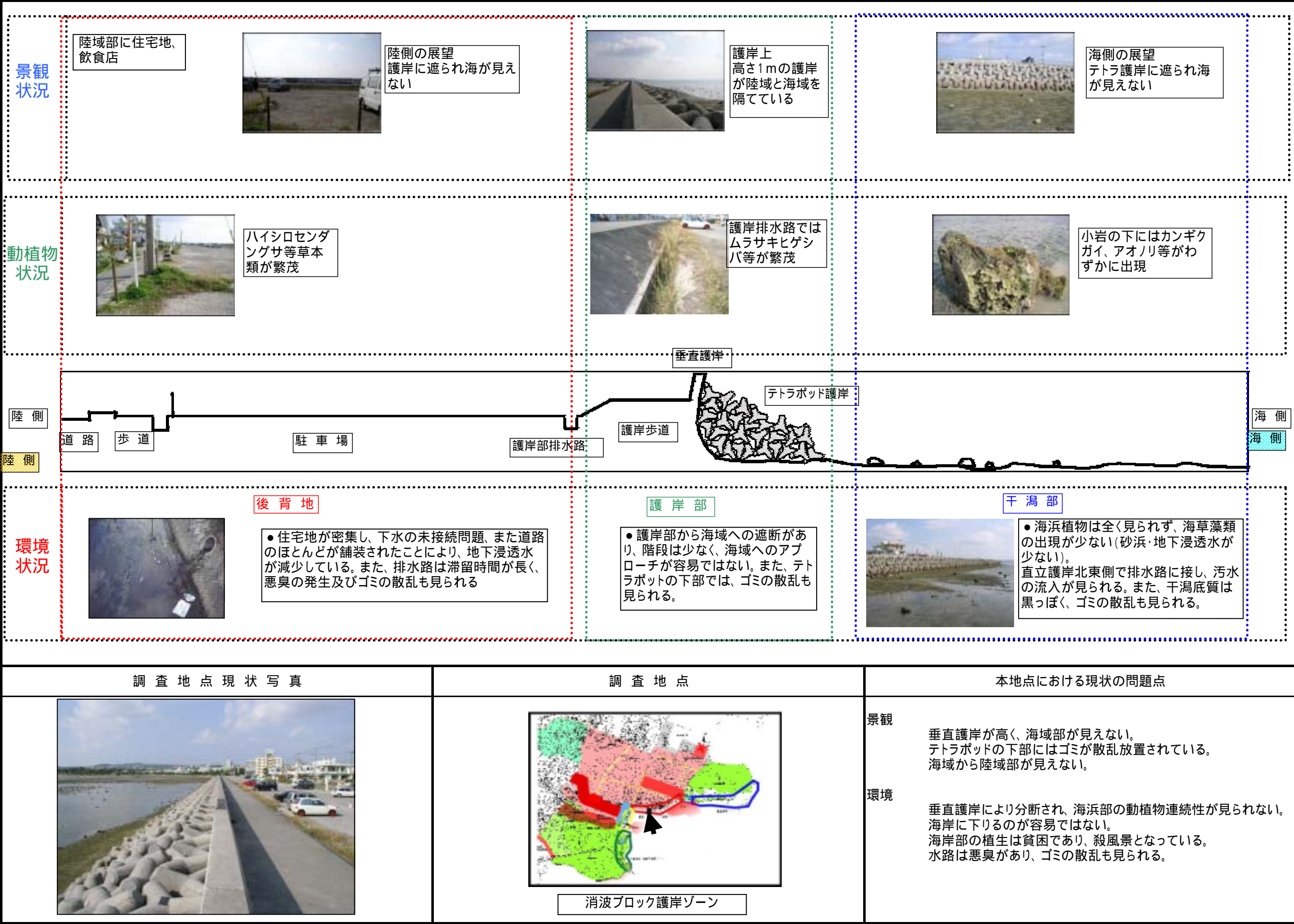


図 - 4 旧塩田前(消波ブロック護岸ゾーン)

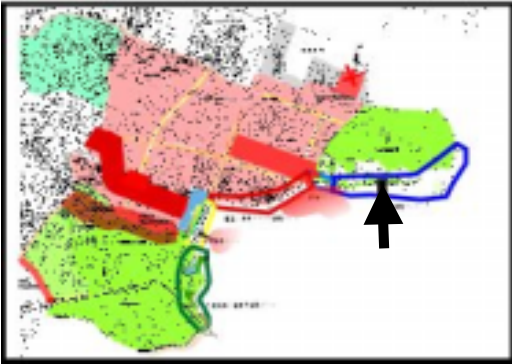
景観 状況	護岸上の展望 見通しはよく、干潟が眺望できる。 陸域部は泡瀬通信施設 (米軍施設) 護岸で散歩が利用される		護岸下 高さ1mの護岸が陸域と海 域を隔て、樹木の上が見える程度。		海側の展望 護岸が続き、陸域と海域を隔てている。 干潟部で潮干狩り	
	通信施設内にはモクマオウ、ハイキビ、ハイシロノセンダングサ、シマグワ、ギンネムが見られる。		護岸はセメントで覆われている。 鳥類はチドリ、シギ、		干潟部でイソハマグリ、カヤノミカニモリガイ、カンギクガイ、アマオブネガイ、イボウミニナ 植物はハイテングサ、アオリ、イワノカワ、無節サンゴモが生息	
	通信隊 道路 側溝 歩道 砂浜 干潟部		直立護岸			
環境 状況	後 背 地 基地内に污水発生源は見られず、また基地内は全面芝地となっており、砂採取跡地はため池状となっていることから、地下浸透水が期待できる。		護 岸 部 干潟部 直立護岸により陸域と海域が完全に分断している		干 潟 部 干潟で潮干狩り、釣りえさ用のゴカイをとる人が確認され、わずかに残る砂浜、干潟に生物は多く見られた。	
	調 査 地 点 現 状 写 真		調 査 地 点		本地点における現状の問題点	
			 直立護岸ゾーン		景観 垂直護岸が高く、陸域部が見えない。 歩道はセメント張りで殺風景である 動植物 砂浜部でイソハマグリが確認された。 環境 垂直護岸により分断され、海浜部の動植物連続性が見られない。 海岸に下りるのが容易ではない。 海岸部の植生は貧困であり、殺風景となっている。	

図 - 5 泡瀬通信基地前(直立護岸ゾーン)